

若者とNPOがまちで一緒に育ちあう環境づくり

全国NPO インターンシップ 事例集



NPOインターンシップで多様な参加を応援し合う社会を!

プログラムを通じて、若者とNPOが育ち合う場が各地に生まれています。いくつかのエピソードをご紹介します!

参加者の成長を感じたエピソード

学歴コンプレックスのあった大学生が、インターンシップに参加したことで、さまざまな考え方をする人たちと出会い、対話を通して**自身の生き方に自信と誇り**を持つことができるようになった。

活動当初は言われたことのみ活動をしていましたが、修了する頃には**自分で考え、主体的に行動**することができるようになった。また、自分の活動するNPOの対象分野について**人に伝えられるくらい深く理解**できるようになった。

最初は親の勧めもあり、なんとなく参加したという印象の学生が、プログラム後半に差し掛かった時期から、**自主的・積極的に活動に参加し始め**、ついには友だちにも参加を呼びかけ途中参加させた。

団体の活性化を感じたエピソード

里山地域活性化のプログラムの中で地区の運動会に参加した際、その地域ではそれまで高齢化を理由に運動会に参加すらできなかったが、その年はインターン生の活躍もあり、上位入賞することができて、**地域住民も大いに盛り上がった**。

各団体のインターンシップの内容や研修の内容を、参加団体間で検討するため、**お互いにプログラム設計のノウハウや、人材育成の仕組みについて学べる**。このプログラム以外のボランティアの受け入れやスタッフ育成にも生かしている。

プログラム終了後も**学生が活動した団体に定着し、継続して団体のボランティアとして活動を続ける**ことが増えている。



はじめに

“NPOインターンシップが、地域社会に貢献できること —その価値をまとめ発信していくこと”

私たち「NPOインターンシップラボ」は、NPOインターンシップの持つ価値や力、その可能性を信じ、2018年度より活動を開始しています。

全国各地では、様々な分野のNPOが市民の暮らしや仕事に関わる地域というフィールドで活躍しています。その中で、若者がNPOの一員として活動する「NPOインターンシップ」によって、若者もNPOも育ち合う地域づくりが芽吹いています。

NPOインターンシップでは、地域やNPOに新たな息吹をもたらす「若者」、その若者を地域とつなげ、成長を支える「NPO」と共に、その仕組みをより充実したものとする「コーディネーター」の存在が非常に重要です。

本事例集が、NPOインターンシップについて理解を深める一助となり、手に取っていただいた地域の間支援NPOやコーディネーションを担う人材/団体の皆さんが次の一步を踏み出すきっかけにつながることを願っています。

こんな人に読んでほしい

地域のコーディネーターの皆さん



若者の育成に関わっている
コーディネーター



地域の団体を
盛り上げたい
コーディネーター



NPOインターンシップの
実施を考えている
コーディネーター

CONTENS / 目次

第1章 NPOインターンシップの特徴	P04～P05
第2章 事例紹介	P06～P13
第3章 過去の事例から	P14～P16
第4章 各種記録・まとめ	P17～P19

第1章 NPOインターンシップの特徴

NPOインターンシップとは

NPOインターンシップは地域の活動に関わる人を増やすことができる市民活動の種まきのしくみ主に大学生・専門学生・高校生がNPO等で一定期間インターンシップ(就業体験)をするプログラムです。運営主体や実施期間などは様々ありますが、ラボではその中でも就職や採用を主目的にするのではなく、学生・生徒が地域やNPOについて学び、社会参加するきっかけ作りとして行われているプログラムを対象としています。

※本事例集ではNPO単独で受け入れているものではなく、複数団体が受入に参加し、学生や受入団体へのコーディネート機能を有しているプログラムを対象としています。



生まれている効果

- ・NPOが活性化し、発展する
- ・地域と若者がつながる
- ・若者の経験値が高まる
- ・主体的に動ける人が地域に増える
- ・地域が活性化し、多様なつながりが活動に活きている
- ・社会の課題解決が促進される

NPOインターンシップでまちなかに **小さな主人公**が増える！

小さな主人公とは？

リーダーを育てる仕組みはいろいろありますが、リーダーはひとりだと孤立してしまいます。普段はあまり表に出ないけれど、NPOに参加することでそういうリーダーを支えて地域を盛り上げていける若者の存在が必要になります。「まだやりたいことがわからない」「自分に自信がない」という普通の若者が地域に出ることで、そのような、いわゆる「フォロワー層」になるのではないかと考えています。

1) リーダーを支えるフォロワー的存在である
小さな主人公も大事

「リーダー的な主人公」

NPO・社会的企業等の立場で
新たな道を切り拓く



この層の担い手を
育てることだけでなく、

「小さな主人公」

普段はあまり表には
出ないけれど、NPOや
地域の活動に関心・共感を寄せる



こっこの層も
大事!!

2) そうした小さな主人公はNPOインターンシップの
ような体験型プログラムで育まれる

やりたいことが
まだわからない…

自分のできるところから
もうちょっと何かやってみたい!



体験

NPOインターン
シッププログラム



自分に自信がない…

まずは企業に就職するけど、
できる範囲でまちなかに関わりたい!

※本来、すべての人はその方の人生における主人公ですし、主人公に大きいも小さいもないところですが、今回はあえて新たな動きで社会を切り拓かれ、時に表舞台に立つこともあるリーダー的な主人公との対比で「小さな主人公」という表現を用いています。

社会貢献と就業体験のハイブリッドの特徴を持つ NPOインターンシップ



神奈川大学 経営学部
山岡 義卓先生

NPOインターンシップについて学生と受け入れNPOに調査した結果*に基づいてNPOインターンシップの特徴をご説明します。

*詳細は、山岡義卓ら、大学生を対象としたNPOインターンシップの役割について、国際経営論集(2015)参照。

(1) NPOへの入り口機能

学生にとってNPOインターンシップはNPOの世界の入り口として機能しています。すなわち、インターンシップ参加前に6割強の学生は「NPOの存在や活動は見聞きしたことがあるが、詳しく知らなかった」または「NPOという言葉は知っていたが、存在や活動については知らなかった」という状態であるのですが、終了後は「NPOや民間非営利組織への関心が高まった」(68.0%)と回答し、さらには「NPOや市民活動団体の活動に注目し、興味や関心が向けば活動に参加したい」(60.0%)と考えています。

(2) 社会全体としての人材育成

他方、受け入れNPOにとっては人材育成の意義が大きいことがわかります。ただしそれは自団体の人材育成(採用や研修等)という観点よりも社会全体における人材育成の要素が大きいことが伺えます。たとえば、受け入れNPOへのインタビュー調査では次のようなコメントが見られています。こうした姿勢は採用を前提とした企業のインターンシップとは大きく異なるものでしょう。

- ・意欲が低い人でも基本的には受け入れ、その人が活躍できる場所を提供できるようにする。
- ・どんな人でも拒まないで、来てほしい。話ができれば大丈夫。専攻などは気にならない。
- ・困った学生にこそ来て育ててほしい。時間はかかっても可能性を信じたい。

ところで大学生がNPOに関わる機会としてはインターンシップよりもボランティアが一般的でしょう。そこでボランティア活動との対比も含めてNPOインターンシップの特徴を整理してみると、下図のように理解できるのではないかと考えています。



すなわち、NPOにおけるインターンシップは社会貢献と就業体験のハイブリッドであるということです。インターンシップは就業体験ですので、ボランティアを志向する学生(社会貢献志向の学生)とは異なる層が関心を持つと考えられ、NPOに関わる人材の裾野を広げることに貢献するでしょう。また、ハイブリッドという性質を考えれば、学習できる範囲も広がることが期待できます(キャリアデザイン的な要素はもちろん、地域や社会課題について考えることもできる等)。こうした観点から、NPOインターンシップはボランティアとはまた違った可能性を秘めた活動だと言えるでしょう。

以上、短い紙数の中で十分に説明しきれませんが、インターンシップあるいはNPOインターンシップのこうした特徴を踏まえてそれぞれの事例を紐解き、活動の可能性を探っていただければ幸いです。

第2章 事例紹介

全国で実施されているNPOインターンシップの中からいくつか紹介します

参加者もNPOメンバーも同世代だからこそ若者の声を引き出せるプログラム

事例1 NPOインターンシップ（札幌市）

運営：札幌市市民活動サポートセンター
（指定管理者：公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会）

目的	市民活動に係る新たな担い手の発掘および育成、市民活動団体への参加促進を図る。また、「社会的課題と自分の関わり」「生き方」「働き方」について考える機会を提供する。		
インターン期間	7～11月の間で4日間以上	開始年	2014年
主な参加者	NPO活動に関心のある概ね30歳までの若者（高校生、大学生が中心）		
主な運営費	施設事業費		
参加者数	33人（開始年よりのべ） / 14人（直近年実績）		
受入団体数	23団体（開始年よりのべ） / 4団体（直近年実績）		
プログラムURL	なし（運営団体ホームページ https://www.shimin.sl-plaza.jp/ ）		

プログラムの特徴

— 特色を教えてください。

幅広い年代のメンバーがいる中で、参加者と同年代のメンバーがいるNPOに受け入れをお願いしています。また、プログラム全体のコーディネーターをNPO代表者にお渡し、参加者により実践的かつ主体的な取り組みを促すようにしています。

— 協力機関はありますか？

札幌市内で活動する4団体のNPOに協力いただいています。

— 工夫していることは何ですか？

他事業（NPOワークショップ、NPO基礎講座、NPO法人設立講座）を先行して行い、対象となる世代の参加者に向けてPRすることでNPOインターンシップへの参加を促しています。

プログラムの流れ

4～5月：募集

6月：事務所訪問ツアー

7～11月：インターンシップ

（10月：中間報告会）

12月：まとめの会



ポイント!

運営にあたって、社会参加が専門のNPO法人ezorockに協力を依頼。ダブルコーディネイト体制で厚みのあるプログラム運営が可能に。

事例2 チャレンジインターンシップ事業(福島県)

運営:[主催]福島県企画調整部文化スポーツ局文化振興課 [共催]コカ・コーラ ボトラーズジャパン株式会社
[事務局]ふくしま地域活動団体サポートセンター(運営委託:認定NPO法人ふくしまNPOネットワークセンター)

目的	福島県内で復興活動をするNPO法人で若者が自発的かつ意欲的に復興・創生に貢献することを応援する。また、地域の課題解決について学び、体験する機会を提供することで、若者の福島への愛着心の醸成や県内への定着を目指すと共に、成長の機会となることを目的とする。		
インターン期間	夏休み期間の1週間～10日間	開始年	2015年
主な参加者	高校生、大学生、専門学校生	主な運営費	委託金
参加者数	202人(開始年よりのべ) / 55人(直近年実績)		
受入団体数	96団体(開始年よりのべ) / 24団体(直近年実績)		
プログラムURL	https://f-intern.f-saposen.jp/		

プログラムの特徴

一特色を教えてください。

福島県在住、または本県出身の高校生・大学生・専門学校生を対象に夏休み期間の10日程度、福島県内にあるNPO法人でインターンシップ活動を行います。

一協力機関はありますか？

コカ・コーラ ボトラーズジャパン株式会社に協力いただいています。

一工夫していることは何ですか？

活動報告書や壁新聞を作成し、インターンシップの素晴らしさやNPO活動を幅広く発信しています。また、コカ・コーラ ボトラーズジャパン株式会社から、インターンシップ参加者に対し、活動の様子をまとめた動画を制作し、閉講式時に放映しています。

プログラムの流れ

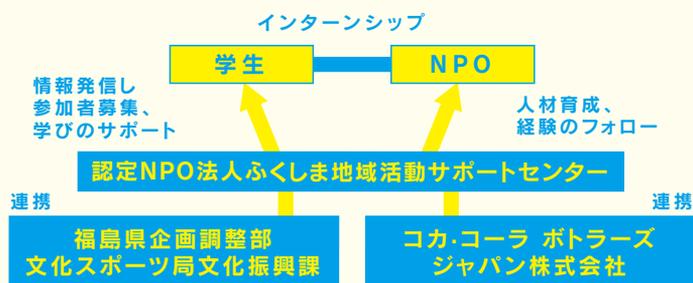
4月:受入れ団体募集、決定

5月:学生募集

6月:開講式・マッチング会

7月下旬～9月中旬:インターンシップ

10月:閉講式



ポイント!

「福島県の復興・創生に若者が貢献することを応援する」という明確な目標のもと、県、企業、NPOの三者が協働運営する特徴的な事例。

事例3 たかはら子ども未来基金(学生インターン部門)(栃木県)

運営:とちぎコミュニティ基金

目的	奨学金を借り、バイトと学業に忙しい学生も多く、なかなか社会貢献、体験活動ができない人もいるという背景を受けて、より多くの学生にNPOでのインターンを体験してもらうことや、地域のNPOに多世代が参加する仕組みをつくることを目的にしている。		
インターン期間	8～3月の間で約24日間	開始年	2017年
主な参加者	大学生、専門学校生などの若者	主な運営費	篤志家からの寄付
参加者数	12人(開始年よりのべ) / 5人(直近年実績)		
受入団体数	11団体(開始年よりのべ) / 4団体(直近年実績)		
プログラムURL	www.tochicomi.org/subsidy/takahara/		

プログラムの特徴

一特色を教えてください。

篤志家の方にご支援いただき、インターンシップに対して奨励金が出るため、学生にも団体にも参加しやすい仕組みになっています。

一協力機関はありますか？

広報や審査などの面で栃木県内の市民活動団体や大学に協力していただいています。

一工夫していることは何ですか？

毎年活動する学生が5人程度と少人数でアットホームな雰囲気、交流しながら、つながりをつくっています。2019年は学生同士の交流会も定期的に開催し、お互いのNPOに行ってみる見学ツアーを企画したり、活動の様子をまとめたニュースレター「たかはら日和」を学生が作成したりと、学生が主体的に活動しています。

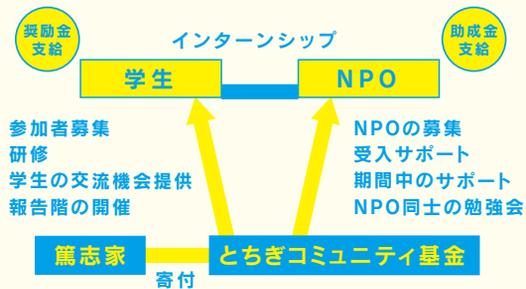
プログラムの流れ

5～6月:応募

8月:オリエンテーション

8～3月:インターンシップ(間に交流会や勉強会)

3月:報告会



ポイント!

篤志家からの寄付による運営はコミュニティ基金ならではの、地域でお金と人のよい循環を作ってる事例。

事例4 CSOラーニング制度(全国)

運営:公益財団法人SOMPO環境財団

目的	「木を植えるより、木を植える人を育てたい」という想いから本制度を開始した。インターンシップを通じて、環境問題や市民社会のあり方について考える視野の広い人材を育成することならびに、CSO(Civil Society Organization)へのマンパワー支援を目的としている。		
インターン期間	6~1月(8か月間)	開始年	2000年
主な参加者	大学生、大学院生	主な運営費	SOMPOグループ企業、社員による寄付金
参加者数	1000人以上(開始年よりのべ) / 58人(直近年実績)		
受入団体数	約70団体(開始年よりのべ) / 45団体(直近年実績)		
プログラムURL	www.sompo-ef.org/cso/cso.html		

プログラムの特徴

一特色を教えてください。

合宿や定例会には必ず財団の職員が出席し、自主プロジェクトなどの企画運営に関してアドバイスをします。インターン生に支払われる奨学金の財源には、SOMPOホールディングス社員約1万人が毎月寄付をするファンドを活用しています。

一協力機関はありますか？

損害保険ジャパン日本興亜株式会社に協力いただいています。

一工夫していることは何ですか？

CSO団体との綿密な連携を活かし、毎月インターン生とCSO担当者、財団で課題や悩みを共有し、次月以降の活動設定に活かしています。インターン生主導の「自主プロジェクト」も活動の一環として導入しました。全国合宿では学生の活発な交流や本制度のOB・OGとのかかわりを通じて学生に多様な考え方に触れる機会を提供しています。

プログラムの流れ

3~5月:募集、選考(説明会、面接)

6~1月:インターンシップ(各団体での活動・毎月の定例会・自主プロジェクトの実施)

2~3月:まとめ(修了レポート執筆・修了式参加)※8月と3月に全国合宿を開催

+インターン活動を通じて学びと
社会経験による成長
+意欲あふれる仲間との出会い

+意欲ある学生に
理念と活動を伝える機会
+組織の活性化



ポイント!

企業財団が中心となって環境をテーマに全国規模で実施している事例。
20年間の実施の中で、1000人以上もの卒業生を輩出してきたプログラム。

事例5 NPOインターンシップ ツナガルカンケイ(横浜市)

運営：NPO法人アクションポート横浜

目的	NPOや地域課題に関心をもつ学生を発掘し、NPOの活動経験を通して、市民活動を支える人材を育成すること。		
インターン期間	短期：約10日間(80時間) / 長期：3～6か月間(200～400時間)		
主な参加者	大学生	開始年	2009年
主な運営費	大学の実行委員会費、卒業生・団体による寄付、運営団体負担金		
参加者数	約600人(開始年よりのべ) / 約70人(直近年実績)※短期60人、長期10人		
受入団体数	約180団体(開始年よりのべ) / 26団体(直近年実績)		
プログラムURL	http://intern.yokohama/		

プログラムの特徴

一特色を教えてください。

大学との連携により単位認定、運営にも協力しているなど協働で運営しています。また、プログラムの中にNPO同士の連携・情報交換の場を設けています。卒業生が運営に関わるなど、卒業生と現役生のつながりづくりもしています。

一協力機関はありますか？

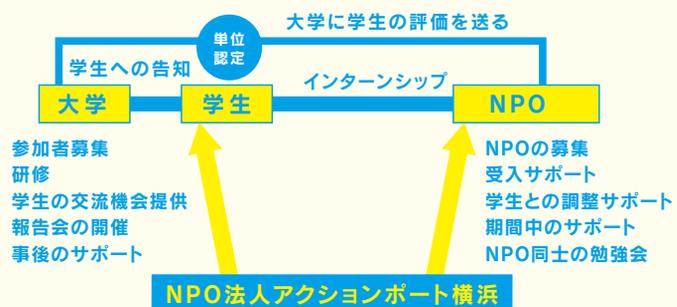
横浜市内および近隣地域に所在する10大学に運営を協力していただいています。

一工夫していることは何ですか？

プログラムの中で、参加学生同士がつながる機会や参加団体が学生の受け入れノウハウを共有する機会を設けるなど、参加者同士がつながるような工夫をして運営しています。

プログラムの流れ

- 4～5月：応募
- 6～7月：お見合い会、研修会
- 8～9月：インターンシップ
- 10月：短期報告会
- 3月：長期報告会



ポイント!

大学を巻き込んだ運営(単位認定等)が大きな特徴。参加・定着する学生が増えるようNPO側へのサポートやNPO同士のつながりにも注力。

事例6 社会を知るためのワカモノ×NPOインターンシッププログラム(藤沢市)

運営: 認定NPO法人藤沢市民活動推進機構

目的	ワカモノが自ら考え、自ら学び、自分の道を選ぶことができる力をつけた人材が育つことや、NPO・市民活動団体の組織基盤の強化、プログラムを他地域に展開することを目的としている。		
インターン期間	7月1日頃～1月中旬	開始年	2014年
主な参加者	高校生、専門学生、大学生、大学院生で、概ね30歳未満		
主な運営費	助成金、別途事業収入		
参加者数	92人(開始年よりのべ) / 8人(直近年実績)		
受入団体数	68団体(開始年よりのべ) / 8団体(直近年実績)		
プログラムURL	http://f-npon.jp/project/wakamono		

プログラムの特徴

一特色を教えてください。

ワカモノコースと高校生コースの2つがあることです。高校生コースは活動時間を短縮したことで、活動と学業との調整をしやすいです。また、継続して活動に取り組めるよう、活動1時間あたり400円の助成を行います。

一協力機関はありますか？

弊機構が管理運営をしている藤沢市民活動推進センターと市民活動プラザむつあい、ワカモノOB・OGの有志によるサポートメンバー数名、広報の面で学校関係者10名程の方に協力いただいています。

一工夫していることは何ですか？

集大成の場である「成果発表会」の企画運営をワカモノが行います。プログラム内容や発表テーマ、広報など0から企画します。ワカモノの横のつながりが強化され、また、インターン活動での経験や感じた想いや考えをどんな風に伝えたいかを意識する機会となっています。

プログラムの流れ

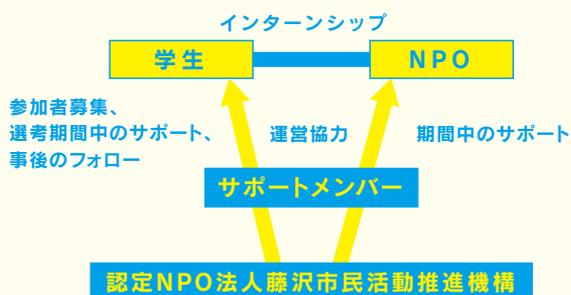
4月～5月: 広報、説明会

6月: 個別面談、活動先マッチング、オリエンテーション

7月～1月: インターンシップ(定例会、研修会、

受入担当者座談会、中間発表会)

2月: 成果発表会



ポイント!

高校生を積極的に巻き込み、高校生・大学生が定例会等で関わり合うことで、双方の成長により成果を生み出している。

事例7 NPOインターンシップ活動体験 2019(小松市)

運営：NPO法人こまつNPOセンター

目的	25歳以下の若者が日頃関わる事の少ない地域のNPOや市民団体の活動を体験することで、地域の課題を知り、さまざまな知見を広め、新しい出会いなどの体験を通じて人間力の向上とともに、地元への理解と愛着・つながり促進を目指す。		
インターン期間	約10日間(80時間)	開始年	2019年
主な参加者	高校生	主な運営費	運営団体負担金
参加者数	2人(開始年よりのべ) / 2人(直近年実績)		
受入団体数	1団体(開始年よりのべ) / 1団体(直近年実績)		
プログラムURL	komatsunpocenter.jimdofree.com/npoインターンシップ/		

プログラムの特徴

— 特色を教えてください。

地元への理解と愛着の促進をめざし、募集地域を小松市及び隣接市町に限定しています。また、参加対象として、高校生に重点を置いています。

— 工夫していることは何ですか？

参加者相互、受入団体相互が交流できる場と機会をプログラムしています。

— 協力機関はありますか？

小松市には広報協力や関係機関(小松大学や小松市立高校など)への働きかけの協力、小松大学には学内の地域連携推進部署から学生全般に事業紹介と参加呼びかけの協力をいただいています。

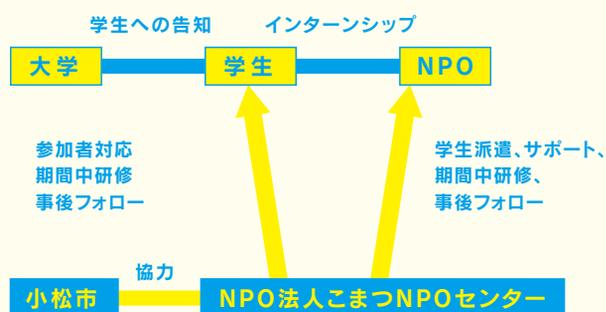
プログラムの流れ

4～5月：応募、説明会

6月：面接、オリエンテーション

7～11月：インターンシップ

12月：報告会



ポイント!

2019年度に新しくスタートした地域密着のプログラム。大学生の多くは市外に進学してしまうため、その手前の高校生に着目。今後の展開に注目。

事例8 ESD学生インターンシップ(岡山市)

運営：岡山ESD推進協議会
 [事務局]岡山市市民協働局市民協働部 SDGs・ESD推進課
 (事業委託：NPO法人岡山NPOセンター)

目的	岡山市内で社会課題の解決や地域資源の活用に取り組む地域コミュニティやNPO、公民館などの活動や学びの現場の業務を体験する機会を提供し、将来のESDを担う教育者及び、持続可能な地域づくりに参加する人材の育成を図る。				
インターン期間	夏季：8～9月の間で約11日間 / 春季：2～3月の間で約9日間				
主な参加者	大学生	開始年	2015年	主な運営費	委託費
参加者数	83人(開始年よりのべ) / 20人(直近年実績)				
受入団体数	76団体(開始年よりのべ) / 15団体(直近年実績)				
プログラムURL	www.okayama-tbox.jp/esd/pages/6122				

プログラムの特徴

— 特色を教えてください。

ESDを軸にしたプログラムであることから、NPO法人等の非営利活動を行う団体に限らず、公民館やその他の法人格をもつ組織に対しても学生の受入実績があります。

— 協力機関はありますか？

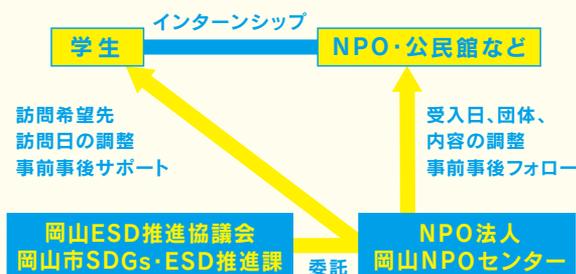
岡山市市民協働局SDGs・ESD推進課を受入担当課とし、岡山ESD推進協議会等で協働するNPO、公民館と連携して企画、実施しています。

— 工夫していることは何ですか？

団体訪問前に、ESDやNPOや訪問する団体に関する調べ学習を行います。団体訪問終了後は、市民を対象に報告会を行います。これにより、学習内容の充実を図るとともに報告・発信を通じたESDの実践が経験できます。

プログラムの流れ

【夏季】6～7月：募集→7月：事前説明会
 8～9月：インターンシップ(事前研修、報告会)
 【春季】12～1月：募集→1月：事前説明会
 2～3月：インターンシップ(事前研修、報告会)



ポイント!

行政と協働して運営される。ESD=持続可能な社会づくり担い手育成を掲げたテーマ型でのインターンシップ。受入団体の選び方やプログラムの内容に個性が光る。

第3章 過去の事例から

リクルートではなく、若者への投資のためのプログラム

事例1 日産 NPOラーニング奨学金制度(全国)

運営：日産自動車株式会社

目的	多様で労働流動性の高くなりつつある将来社会に備え、未来の社会を支える若者が、“ダブルメジャー”で学業とは別のもう一つの知的体験を積んで、自身の社会で働く姿をより具体的に描き勇気をもって卒業し社会に巣立っていくことができる仕組みにより、未来への投資を図る。		
インターン期間	9か月間		
主な参加者	関東及び関西の大学生、大学院生	実施期間	1998～2007年
主な運営費	運営団体負担金		
参加者数	170人(実施期間のべ) / 18人(最終年実績)		
受入団体数	20団体(実施期間のべ) / 16団体(最終年実績)		

プログラムの特徴

一特色を教えてください。

学生に奨学金として活動1時間あたり1000円(9か月間で上限300時間)と交通費を支給します。また、受入NPOへ支援金も支給します。本制度は、リクルート対策ではなく、**未来を担う若者への「投資」**として行うため、**NPOやボランティアに関わったことのない学生にこそ学ぶ機会を提供したい**と考えます。奨学生の選抜基準は、この経験をする事によってどのくらい成長できるか、変化できるか、専門性を培えるかという「ポテンシャル」です。

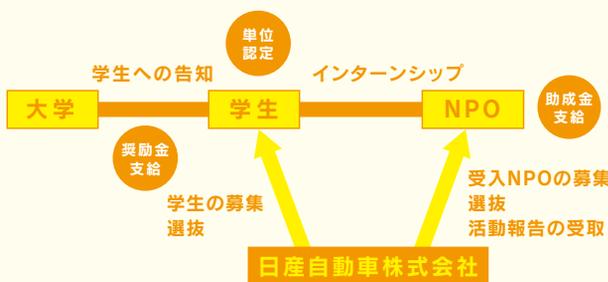
一工夫していることは何ですか？

以下の6つの点を備えたNPOとパートナーシップを結ぶことです。

- ①日産と共有できるミッションを持っている
- ②専門性に優れオリジナリティーがあり、高い質を持つ活動である
- ③優れたリーダーシップを持つ責任者が存在し、信頼性の高い組織である
- ④社会的影響力のある活動となる可能性がある
- ⑤会費、会社・個人からの寄付など財務のバランスがとれている
- ⑥情報発信力がある

プログラムの流れ

公募 → 学生選考 → スタートアップセミナー → インターンシップ → 修了式、報告会、懇親会(社長自ら学生に終了証を授与)



ポイント!

1998年にスタートしたNPOインターンシップ草分け的なプログラム。学生、NPO双方への奨学金や支援金の支給、**若者への「投資」としてNPOを学びの場として開く視点**など、その後につづくプログラムに影響を与えている。

事例2 SSCSインターンシップ奨励プログラム — NPOの現場を市民社会の小さな学校に(全国)

※SSCS=Small Schools for Civil Society

運営：NPO法人市民社会創造ファンド

目的	若者が、自発的かつ意欲的にNPOでのインターン活動を行い、社会的な視野と志をもつ「市民社会人」として成長することを目指す。また、受入NPOが、人を受け入れ、育てることを通して、NPO自らの成長発展の契機とする。		
インターン期間	7月～3月(9か月間) / 7月～6月(1年間) ※活動時間は300～400時間		
主な参加者	NPOに一定の関心を持ち、自らの将来について方向性を持ち、大学・大学院等で学んでいる若者(原則おおむね30歳代まで。学部・学科・専攻等の指定はなし)。		
実施期間	2003～2010年	主な運営費	個人篤志家による寄付金
参加者数	74人(実施期間実人数) / 11人(最終年実績)		
受入団体数	21団体(実施期間のべ) / 8団体(最終年実績)		

プログラムの特徴

— 特色を教えてください。

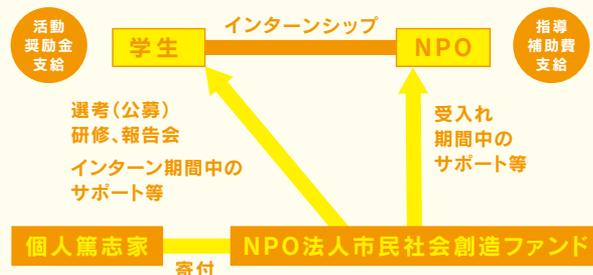
受入れ団体は毎年、関東の現場型の団体・地方のNPO支援組織を組み合わせています(公募はせず、プログラムオフィサーが個別に交渉する)。原則3年で入れ替わります。また、インターン生には1時間700円(2010年時点)の活動奨励金、および交通費、研修費などを支給し、損害保険と損害賠償保険にも加入します。受入れ団体には、インターン生1人の場合月3万円、2人の場合月4万5千円の指導補助費(助成金)を支払います。

— 工夫していることは何ですか？

SSCS運営委員会を別途設置し、プログラムの助言をもらいながら運営を行います。また、受入れ団体にはスーパーバイザーとメンターによる「責任ある指導受け入れ体制」を組んでもらいます。市民社会創造ファンド(事務局)もインターンを受入れ、インターン全員の活動報告書等のとりまとめ、及び研修会や合宿等の企画を行い、さらに修了報告書も企画・編集し発行します(7月末頃発行)。また期間中は事前の研修と入校式、中間及び修了報告会を開催しています。

プログラムの流れ

5月～6月：応募、選考 → 7月：事前研修、入校式 →
11月：中間報告会 → 3月：修了報告会(活動期間が9か月のインターン生対象) →
6月：修了報告会 → 7月：修了報告書提出



ポイント!

ある個人篤志家の想いを契機に始まり、8年間で多くのNPO人材を輩出。毎年、地方のNPO支援組織も受入NPOとすることで、地方への横展開を目指した。

事例3 長期実践型NPO・NGO インターンシッププログラム(京都市)

運営：NPO法人ユースビジョン

目的	地域で若い人材を育てることで、市民・公益セクターの次世代育成を図る。		
インターン期間	前期：4～10月 / 後期：10月～3月 約6か月間 ※活動時間は週1～2回、200～400時間。		
主な参加者	NPO・NGOで働きたいと考える大学生、大学院生、若手社会人(概ね30代まで)		
主な運営費	インターン生の参加費、助成金	実施期間	2007～2012年
参加者数	80人(実施期間のべ) / 15人(最終年実績)		
受入団体数	55団体(実施期間のべ) / 8団体(最終年実績)		

プログラムの特徴

一 特色を教えてください。

NPO・NGOで働きたいと考える若者が対象であることです。修了生の一部は、その後もインターンや常勤スタッフとして団体に残り、活動を続けています。プログラムの応募説明会の企画や当日の運営に修了生も関わっています。**修了生のコミュニティ**もあります。

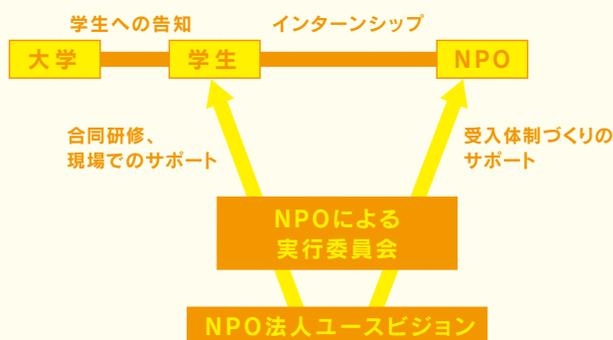
一 工夫していることは何ですか？

各団体のインターンシップの内容は、実行委員会で共有・意見交換しながら設計します。**団体・プロジェクトごとに適した人材や参加要件、得られることなどを明確に記載**し、参加者の応募を受け付けています。実行委員会はNPO法人ユースビジョンの他、NPO法人テラ・ルネッサンス、NPO法人地域環境デザイン研究所ecotone、NPO法人きょうとNPOセンター、(社福)京都福祉サービス協会、(財)京都市ユースサービス協会などが主要構成団体です。

プログラムの流れ

1月中旬～4月中旬：募集、選考 →

4月～10月：インターンシップ(合同研修、事前研修、合宿、中間研修、最終研修)



ポイント!

学生が自ら参加費を払って参加する仕組み。本気の学生をNPOがインターンだけでなく**合同合宿などを通じて共に育ち合うことを目指したプログラム。**

第4章 各種記録・まとめ

チラ見せ!全国のNPOインターンシッププログラム実態調査の結果

NPOインターンシップラボでは、2019年1月に全国のNPOインターンシッププログラム(※)を運営する団体を対象に初めての実態調査を行いました。日々のプログラム運営の実態や、大切にしていること、課題などについて、率直な意見を伺っています。その結果の一部を抜粋しご紹介します。

「地域系オルタナティブインターンシップに関する実態調査」調査結果抜粋

調査期間：2019年1月8日～2019年1月25日 / 調査依頼件数：37件 / 回答数：17件(回収率：46%)

ラボからヒトコト

プログラムの理念・目的に含まれる視点は？

- 1位 若者自身の学び・成長(16件)
- 2位 地域の活性化(12件)
- 3位 受入れ団体の支援(11件)

各プログラムによって成り立ちや目的は異なりますが、「若者自身の学び・成長」は大半の団体が目的として掲げていました。ただ一口に若者の成長といっても、①市民活動やNPOにおける人材育成を目指すもの、②NPOに限定せず地域で活躍する人材育成を目指すもの、あるいは③広く若者のキャリア形成支援のひとつとして実施されるもの、など中身は様々。各地域の背景やプログラムの趣旨に合わせた目標設定が大切ですね。

プログラム運営の中でもっとも時間をかけているところってどんなところ？

- 1位 インターン生への対応(13件)
- 2位 事前研修・報告会等の企画実施(9件)
- 3位 日常の事務局業務全般(7件)

目に見える研修会・報告会の実施の他に、個別のインターン生とのやり取りにもっとも時間をかけている団体が多いようです。相談内容も、活動中のちょっとした悩みから、時には人生相談(!)まで様々。受入れ団体の担当者だけでなく、団体と学生の間立つコーディネーター(事務局)が、何かあった時に気軽に相談できる「お兄さん・お姉さん」的な存在であることも、時には大切なかもしれません。

プログラムを運営する上で、現在抱えている悩みは？

- 1位 インターン生が集まらない(7件)
- 2位 プログラムの運営資金が足りない(6件)
- 3位 その他(4件)

インターン生募集には多くの団体が悩んでいるようです。広報に関する別の調査項目では、地域の高校や大学でのチラシ配架や授業内でのPR、SNSを通じた告知、OB・OGからの口コミなど、様々な工夫が見られました。大学1年生の必修科目で毎年PRをしているという団体も!その他、資金面はもちろん、受け入れ団体の確保、「コーディネーション」の業務の言語化と担当者間の共有など、悩みはつきません。だからこそプログラム運営団体同士の横のつながりを大事にして、ノウハウを共有していきたいですね。

プログラムを運営する上で、日々工夫している点は?(※自由記述より抜粋)

- ・参加者の主体性を引き出すこと。個性を尊重すること。
- ・若者ときちんと向き合ってヒアリング。SNSを活用したコミュニケーション、適宜個別の中間面談等も実施。
- ・参加者と受入れ団体双方のニーズを、言葉に変換して伝えること。
- ・団体や大学等の関係機関に「当事者性」を持って関わってもらう。できるだけ初めから一緒に考える。

「若者の学び・成長を促す」と、言うは易く行うは難し。各団体の担当者が地道に、若者の目線に立って向き合い、奮闘している様子が見えてきました。また、受入れ団体や関係機関が受け身の「お客様」にならないよう、共にプログラムをつくり盛上げる関係性の中でプログラムを展開するということも、成功の秘訣なのかもしれません。

※ 調査では、就職を目的としたインターンシップではなく、若者の成長や団体・地域の活性化を目的としたインターンシッププログラム全般を「地域系オルタナティブインターンシップ」と定義し、アンケートを行いました。

報告書はNPOインターンシップラボHPよりダウンロードできます。

<https://npointernship-lab.net/archives/96>



事例から見えてきたこと

● 様々な組織のコーディネーターが運営・連携しています

この事例集には8都道府県11の事例がありますが、運営している中間支援組織の形態は様々です。地域性や背景が異なるため、プログラムによって目的も様々であることが特徴の一つです。

運営主体	主な事例
市民活動センター	札幌市、福島市、藤沢市ではセンターの事業、または連携し運営。
民間中間支援組織	横浜市、京都市ではNPO独自の事業として展開。
コミュニティ基金	栃木県では篤志家からの寄付を元にコミュニティ基金が運営。
企業・財団	日産自動車、SOMPO環境財団などの企業が運営する事例もある。

また、福島は企業、岡山は行政、横浜は大学と連携し、広報・運営・資金面での協力を得て実施しています。中間支援組織のみで運営するのではなく、必要に応じて地域の多様なプレイヤーを巻き込んで実施するなど、地域に応じてオーダーメイドできるプログラムであることも特徴です。

パートナー連携事例	主な事例
企業との連携	福島ではコカ・コーラボトラーズジャパン株式会社や福島県と連携し、役割分担をして運営しています。
行政との連携	岡山では岡山市と岡山NPOセンターが連携し、岡山ESD推進協議会が運営主体となって活動しています。
大学との連携	横浜では大学と連携し、プログラムを単位認定して学生の参加のハードルを下げています。
専門団体との連携	札幌では市民活動センターが主催となり、若者系団体がコーディネーターで関わるなど、専門性を生かした運営をしています。

● 若者・地域双方にとって満足度の高いプログラムを行う工夫

どの事例も、お互いの「やりたい」ことを実現するための運営がされていることが読み取れます。事前研修や報告会を実施することは、若者と地域双方の思いや学びの共有だけでなく、インターン生同士のつながりづくりや受入団体同士のノウハウ共有にも有効です。主催の中間支援組織が受け入れ団体を訪問して、実際に運営をサポートしている事例もありました。また、栃木、日産、市民社会創造ファンドでは、団体や学生に向けた奨励金支給があり、横浜、日産の事例は学生が参加することにより単位認定がされるものなどの特徴もみられました。どの事例からも、NPOインターンシップを通して、若者もNPOも育ちあうための工夫がされていることがわかります。

● まちなかの小さな主人公が育つ「インターンシップ」が地域に果たす役割

育てたい人材については、環境人材や地域愛着醸成など、地域性や運営組織によって様々ですが、学生の主体形成と社会参加へのきっかけづくりである点は全プログラムで共通です。また、若者育成だけでなくプログラムを通じて受入側の活動の活性化や人材受入力の向上にもつながっており、組織強化にもつながっているのは大きな特徴です。地域の担い手育成がますます重要になる中で、若者の参加のきっかけを作り、の基盤を整える手法の一つがインターンシップです。

まずはできることから若者との育ち合う環境を作っていきますか。

NPOインターンシップラボとは

NPOインターンシップラボは地域と若者の出会いや双方の成長を促すことができる「NPOインターンシッププログラム」に着目し、運営していく中間支援組織が効果的なプログラムを展開していけるようサポートしていきます。主に関東圏の中間支援組織のスタッフが中心となり、2018年度に立ち上げ、活動しています。



ビジョン

若者とNPOが育ち合い、市民活動への多様な参加を応援し合う社会であること。

ミッション

NPOインターンシップを、全国の中間支援組織に広げ、若者とNPO両方が育ちあう環境づくりに取り組む、まちなかのコーディネーターを増やすこと。

これまでの活動



2019年9月にシンポジウム「まちに“小さな主人公”が育つしかけとは？」を開催

「小さな主人公を育てる実践者が語る未来」「学生が変わる？！地域が変わる？！～NPOインターンシップ徹底解剖～」という2つのテーマでコーディネーターや学生、受入NPOが語り合いました。

報告書をホームページで公開中です！

ラボメンバー募集中！

NPOインターンシッププログラムを中心に学生と地域・NPOとのコーディネーションについて議論する場を作っています。関心のある方はホームページまで！

NPOインターンシップラボでは相談をお待ちしています！

NPOインターンシップラボでは、NPOインターンシップを始め、若者と地域NPOのコーディネーションにまつわる活動への相談に対応しています。NPOインターンシップを運営したい、ノウハウを学びたいなど、お気軽にお問い合わせください！



ラボに相談してみる

プログラムの立ち上げや運営、ノウハウなど、多様なメンバーが対応します。



勉強会を開いてみる

インターンシップの可能性を地域で探るために勉強会を開催する相談も受け付けています。



教科書を販売中

NPOインターンシップ運営のノウハウをまとめました。参考にしてください！

<http://intern.yokohama/recipe.html>



全国NPOインターンシップMAP

現在実施
2020年3月現在

過去実施



参加学生の声

チャレンジインターンシップ事業(福島県)に参加した学生の声

新妻 泉佳さん (参加当時高校1年生)

多くの人との交流を通して、**福島県の心の復興の「今」を知りました。**今後もこのような活動に積極的に参加して、福島から世界へ笑顔を発信していきたいです。



たかはら子ども未来基金(学生インターン部門)(栃木県)に参加した学生の声

桂野 葵さん (参加当時大学3年生)

今までは一部の活動を通して、団体さんのイメージを膨らませていましたが、今回を機により**団体さんに対して理解と共感を深められたと思います。**



発行:2020年5月 / 企画・編集:高城 芳之・今井 迪代・平子 めぐみ
作成協力:NPOインターンシップラボメンバー

<http://npointernshiplab.net/> www.facebook.com/npointernlabo/

この事例集はトヨタ財団 2018 年度「市民参加促進プログラム<展開助成>」の一環で作成しています。